

タイトル:平成 22(2010)年度 教育セミナー

日時:平成 22 年 9 月 18 日(土)~21 日(火)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

泉田 悠里(東北大学大学院国際文化研究科)

【魅惑的なポスター】

私がこの中東☆イスラーム教育セミナーに参加しようと思ったのは、研究室の近くにある掲示板にでかでかと掲示されていたポスターがきっかけです。このポスターはいつも目につく場所に貼られており、掲示板の前を通るたび無意識的にポスターに描かれていた男性と目が合っていた為、気になっていました。そして、昨年当セミナーに参加していた先輩たちの感想を聞き検討したうえで参加することに決めましたが、この魅惑的なポスターがなければおそらく参加していなかったと思います。

【活発な議論】

「どんな人たちが参加するのだろうか。」と実際に参加するまでは不安でした。でも初日の最後のプログラム、懇談会で AA 研に所属している先生方と研究のこと、これからの将来のことなどを話しているうちに、そのような気持ちは吹き飛びました。一つの発表後の議論はとても時間内には収まらないほど熱心に議論が展開されていました。講師の先生方はもちろんのこと、参加した院生も熱心に質問していました。なにしろ私の研究領域は中東です。私と同じ地域を研究している人は同じ大学の同じ講座の仲間たちだけだったので、今回、当セミナーに参加したことで同じ中東地域、同じ分野を研究している仲間と出会えたことは今後研究を続けていくうえで非常に励みになりました。

【将来の「自分」と向き合う場】

研究発表とそれに対する議論は、「自分」あるいは「研究」とこれからどのようにして向き合っていくのかを考えさせられました。初日の東長先生のお言葉には、修士論文と書くにあたって、心身の健康状態、特に精神状態を保つことは大事で、そのためにどうすれば研究に継続的に向き合う「自分」が「自分」でいられるのかを知る必要があるということをおっしゃっていました。タイムマネジメントだけではなくセルフマネジメントも必要なかと将来の「自分」を考える契機となりました。

全体を通して、中東☆イスラーム教育セミナーではとても有意義な時間を過ごせました。講師の方々、参加者の方々、ありがとうございました。

白杵 悠(一橋大学大学院経済学研究科修士課程)

この教育セミナーに参加し、最も印象深くかつ有意義だったのは、中東やイスラームを学ぶというだけでなく、それらを研究する方々との出会いがあったことだと強く感じています。

自身の状況として、自分の大学だけでは、中東あるいはイスラームについて話せ、かつ話がある程度通じる相手、特に同世代の相手と会う機会がほとんどありません。さらに自分の大学のみでは学べる分野も限られているため、中東・イスラームにおける他の自分の研究する分野以外の分野も知りたい、と思ったときにどうしても限りがあります。もちろん、本や論文は多くありますが、やはり直接聞くことはまた違います。そのため、他大学の先生、学生と直接交流できる今回のセミナーはかなり貴重で、たいへん楽しい機会となりました。

具体的には、先生方や受講生含めて、日々どのようなことを考えて研究に臨んでいるのか、という研究姿勢の話から、一般的には珍しい中東への留学についてまで、日ごろはあまり聞く機会がない、しかし重要なことを伺えました。さらに、受講生の発表についても、発表の仕方や、またそれに対する先生方や他の受講生からの質問は、大変参考になりました。どういうときにどういう質問をされるのかなど、自分自身への問いにもなった時間でした。他にも、講座の後に行われた飲み会では中東・イスラームに関連したジョークが飛び出すなど、このセミナーならではの体験もありました。

個人的な話として、大学の授業の関係で2日しか参加できなかったことがたいへん悔やまれます。このため、最初は受講をためらっていました。ですが、2日でも許可していただき、参加しましたが、参加して本当に良かったと感じています。このセミナーを受講していなければ、もしかしたら出会えなかったかもしれない方々の知識や考え方に大きく影響を受け、自分自身の研究を改めて考えるきっかけとなったからです。とにかく悩む前に実行してみる、ということを強く認識したセミナーでした。今後の研究において刺激になりました。

最後に、この機会を提供して下さった関係者のみなさま、ありがとうございました。

近藤 重人(慶應義塾大学大学院法学研究科)

この度は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催、平成 22 年度中東☆イスラーム教育セミナーに参加させて頂きました。4 日間に日程ではありましたが、毎日非常に得るものが大きく、私の今後の研究の方向性を考える上でも大変貴重なセミナーでした。

本セミナーは、主に大学院博士課程の学生を対象にした研究セミナーとは異なり、貴研究所の先生を中心とした先生方の講義が含まれていることが一つの大きな特色になっていると思います。先生方の講義はどれも有意義で、刺激を受けたものばかりでした。東長先生には、単に先生のご専門だけでなく大学院で勉強すること一般に関して、非常に元気づけられるアドバイスを頂きました。近藤先生からは、イラン史研究の大まかな流れを、歴史的事象と合わせて解説して頂きました。斎藤先生には、普段あまり意識していなかった人類学的研究の面白さを教えて頂きました。錦田先生、川端先生にはそれぞれパレスチナ研究、マレーシアのハラール戦略についての興味深いお話を拝聴しました。最後に、間先生には米国の学会でも発表された最新の比較政治の議論を展開して頂き、大いに刺激を得られることができました。もちろん、ここに挙げた先生方以外に、質疑・応答の時間を使って私たちに大きな示唆を与える数々のアドバイスを下さった、飯塚先生、黒木先生、高松先生、吉村先生、床呂先生、西井先生、大川先生の各先生方には感謝でいっぱいであります。

また、他の参加学生の発表にも大変感銘を受けました。佐藤さんは私と同様、クウェートについて研究していますが、私が気付いていなかったことをたくさん気づかせてくれました。鈴木さん、西園さんはそれぞれ非常に詳細にパレスチナのインテリファードとそのナショナリズムに通じてらして、勉強になりました。中国回族という興味深いテーマを扱われている山崎さん、私の研究にも通じる歴史的なアプローチを取っている増野さんのご発表にも大変刺激を受けました。

このセミナーの影の特色と言えらると思いますが、毎晩開催されたセミナー後の一杯は非常に楽しい一時でした。そういった食事の場でも先生方や優秀な学生たちとたくさんお話することができました。このように、セミナー中もその後の懇親会もたくさんの先生方に指導して頂けるこのセミナーは、なんて私たち学生にとって幸せな環境なのだろうと何度となく思っていました。このセミナーでいろいろと学んだ多くのことが今の私の大切な財産です。最後に、この素晴らしい機会を提供してくれた栗原研究所所長、そして応募時点からセミナー中まで何から何まで私たちの活動をサポートして下さいました千葉さんに心より御礼申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

高橋 信哉(拓殖大学大学院修士課程修了)

講座

参加していた学生の質の高さに、驚かされました。自分は、まだ、博士論文を執筆していません。今回参加させていただいた目的のひとつには、中東地域の研究歴が浅く、博士論文の切り口をどのようにしようかとの悩みがあったからです。諸受講生の発表などを聞いているうちに、なんとか打開策を見出せたような気がします。

耳から聞くことの重要性

講座を聞いて、耳から知識や幅を広げることの重要性を再認識しました。人の発表を聞きながら、質疑応答をすることで、文献を読むだけでは得られない刺激を受け、さらに、自分の専門ではない分野に幅を広げるきっかけをつくることができました。

研究に関して

「研究するとは何か」を先生方ご自身の経験に基づき解説していただいたこと、また、「哲学的に論文を書くとは何か」を追求していただいたことに変感謝しております。

私も含め、今後、研究者を志す学生の血肉になったのではないかと思います。

先生方との4日間

諸先生方が受講生たちのレベルに合わせて接していただけたことが、何よりも嬉しく感じました。また、参加されていた先生方が、受講生一人一人に丁寧に接していただけたことに驚きを感じましたとともに、中東分野をこれから勉強していく活力を与えていただきました。

そして、先生方の「高い人間力」に、驚かされました。人間力とは、アスリートでいう筋力であり、研究を継続する上で、必要不可欠なものであります。さらに、研究員の永遠のテーマでもあります。このセミナーで目標にする方々を発見することができました。それとともに、自分も研究分野の知識を広げ、人間力を高めていかななくてはと思いました。

最後に

合宿形式をとった本講座が、「楽しみながら、学ぶ」というスタンスを通し、「受講生同士の横のつながり」を構築することができました。ここで培った、そのつながりを、「馴合いの関係」ではなく、「共に成長していける関係」に昇華していきたいです。

水上 遼(東京大学大学院人文社会系研究科)

2010年9月18日-21日の4日間、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において2010年度中東☆イスラーム教育セミナーが開催され、参加させていただくことができた。本セミナーは、中東研究あるいはイスラーム研究を行う修士課程の大学院生を主に対象としているということだったので、「歴史学」や「アジア史」の中でのイスラーム史あるいはイラン史というアプローチを自明のもののように考えがちであった私は、他の分野からのアプローチというのはどのようなものがあり、その中で歴史学は、あるいは現在の自分はどのように位置づけられるのか、という関心から参加を希望した。同時に、自分と同世代の院生たちがどのようにして研究を行っているのか、ということにも大きな関心があった。以下、本セミナーに参加した感想を述べたい。

セミナーは先生方の発表と受講生による発表とがあり、どちらも発表と質疑応答という形式で進められた。先生方の発表では、大学院生の姿勢・心構えや、最新の研究、研究状況とそれが抱える問題点、といった様々なテーマが扱われ、議論された。いずれのテーマも、これから本格的に研究を志す我々受講生にとっては、日頃から忘れてはならない問題意識だと思う。東長先生の精神衛生の管理についてのお話は、私自身思い当たることがいくつもあり、研究活動における精神面の重要性という点を先生ご自身の経験から聞かせていただいたことはとてもありがたかった。また、近藤先生の歴史学、そしてイラン史研究の危機、というお話は、特に自分にとって良い意味で衝撃的だった。研究の方向性や、現状が研究に与える影響等にも、常に注視しなければならないと思った。

受講生の発表からは、問題関心の持ち方や、論の進め方、議論という点で非常に勉強になった。私自身、自分の問題意識やテーマ設定の上で現在かなり悩んでおり、自分の研究やその方向性をまとめ、提示する発表者たちから大きな刺激を受けた。それと同時に、「では自分はどうするのか」という大きな問題が残ったと思う。自分と同じく研究をスタートさせて間もない受講生たちと議論できたことは、着眼点や方法の面でも非常に参考になったと思うし、それを今後の自分の研究に生かしていかなければならないと思った。

セミナー全体を通じて、多くの発表を聞くことができたと同時に、先生方と受講生が一緒になって質問し議論できたということが、なにより大きな経験となった。議論の場は、教室であり、昼食の部屋であり、お酒の席であり、帰りの電車の中であった。「同じモノ・コトを勉強している」と互いに思える方々との交流は、貴重であると同時に、本当に楽しかった。一方で、自分に残された課題もある。それは今回有志の受講生がすばらしい発表をしたように、自分も自身の考えをまとめ、提示しなければならない、ということである。本セミナーでの貴重な経験を今後の自分の研究に生かしていきたい。

最後となったが、このようなすばらしい教育セミナーに参加させていただいたことに本当に感謝しております。ありがとうございました。